

歴史文化館ニュース 第10号

2013.12.6

企画展「学園創設者梶山正式 没後50年展——その“人”の生きた道」

梶山歴史文化館館長 梶山 美恵子



梶山正式先生の生誕130周年にあたる平成21年に誕生した梶山歴史文化館。館内には常設展として学園の歴史的な資料を展示する「歴史展示室」、創設者梶山正式先生・今子先生の人と生活を知る「正式記念室」、そして企画展の場として「文化展示室」の3つの室があります。常設展の二つの展示室ではお二人の執筆の書籍・手稿類・作品・趣味や生活の遺品類などをいくつか展示していますが、このたび正式先生没後50年にあたり、新たな資料を中心に、お二人の“人”に焦点を当てた企画展を用意しました。

正式先生・今子先生は東京の同じ学校で学び、同じ志を持って明治38年(1905)梶山女学園の前身である名古屋裁縫女学校を創設。58年に亘って学園を牽引され、正式先生は星が丘に大学キャンパスを開設した2年後の昭和39年(1964)年2月に、また夫人の今子先生はその1年後の4月に相次いで逝去されました。

今回の展示では、学園の歩みを日本の教育の歩みの中に位置づけて見ていただくと共に、その時々において正式先生がどのような思

いで学園の発展に尽くしてこられたかを知っていただけます。展示資料には、正式先生の「人間橋由来記」自筆原稿、終戦の年昭和20年12月から毎日書き記されていた日誌など、初めて公開する資料があります。また正式先生の側近だった須田昌平先生の話(「私学人梶山正式」より)や、お二人を直接知る卒業生の方々などから今回の展示に寄せていただいた思い出の文は、お二人の人となりを知る貴重な資料となっています。

卒業生から寄せられた文の中に「咲いた花みてよろこぶならば咲かせた根元の恩を知れ」とありました。この企画展が幼稚園から大学院を擁する総合学園として発展した原点はどこにあるかを再認識し、学園の更なる発展に向かう機会の一つになれば幸いです。(開催期間 平成25年11月1日～平成26年6月25日)

博物館実習で学生が制作した「キャプション」を展示

10月22日(火)、梶山歴史文化館において学芸員資格取得のための「博物館実習」が行われました。実習の目的は、梶山歴史文化館の成り立ちを知ることにより、学校(大学)博物館が目指すものについて学んでもらうことです。授業の後半では、学生の皆さんにキャプションを制作してもらいました。キャプションとは、タイトルや年代など、展示物に添える解説文のことです。学生作のキャプションの数々は現在、企画展『梶山正式没後50年展～その“人”の生きた道～』にて実際に展示しています。企画展の見学に来られた際は、展示品だけでなくキャプションも是非ご覧になってください。



【大正時代の制服がリメイクされました】

生活科学部生活環境デザイン学科・富田研究室の学生さんに、歴史展示室の制服をリメイクしていただきました。新しく復元されたのは、大正15年(1926)に制定された椋山高等女学校時代の制服のブラウスです。今回、リメイク作品を制作するにあたっての感想をお聞きしました。



生活科学部生活環境デザイン学科4年 富田研究室 久保田真帆

今回、椋山女学園の歴史の一部である制服のブラウスの復元に携わらせていただきました。私はブラウスの縫製作業をやらせていただいたのですが、以前授業で制作したブラウスとは違い襟の形がセーラーカラーであったこともあり、縫製手順、構成の難しさに少し戸惑いました。また、歴史文化館の大切な資料を制作しているという重大さと、椋山女学園の制服の清楚で真面目なイメージを崩してはいけないという思いから、慎重に丁寧に制作することを心がけました。制服の完成が近づくに従って、伝統ある椋山女学園の制服の制作に携わらせていただいたことをますます実感し、誇りに思いました。

今回、全てではありませんが、自らが制作に携わった制服が歴史文化館に飾られること、椋山女学園の伝統の一部として関わることが出来た事に感謝の気持ちでいっぱいです。私が卒業した後も、これから椋山女学園に入学されるたくさんの学生の皆様にこの作品を見ていただき、椋山女学園の古き良き伝統を感じていただけたら嬉しく思います。



【伊勢湾台風記録映画への製作協力】

伊勢湾台風は、昭和34(1959)年9月26日夕方、紀伊半島に猛烈な勢力のまま上陸しました。名古屋市では最大で毎秒37メートルの暴風が吹き荒れ、南区、港区などでは高潮に伴う甚大な被害を受けました。この台風に伴う死者と行方不明者は5000人以上に達しました。椋山女学園でも4名の痛ましい犠牲者を出し、被災生徒も220名余りに上りました。

当時、学園では「椋山女学園災害救援隊」が組織され、トラックで被災地に向かって救助支援にあたりました。伊勢湾台風の惨事から半世紀以上を経て、次第に人々の記憶が風化しています。しかし平成23(2011)年3月11日の東日本大震災では、津波により伊勢湾台風をしのぐ大被害となりました。また近い将来、東海地方でも南海トラフに伴う大地震が起きることが予想されています。そんな中で、伊勢湾台風の記録の伝承を目的として、この地方の映画関係者が「伊勢湾台風映画」製作委員会を発足させました。この委員会は地元の企業などが協賛し、平成26(2014)年11月に名古屋で開催される「ESDユネスコ世界会議」と連携し、防災教育に役立てるのが目的とのことです。

その製作委員会のスタッフが、学園に伊勢湾台風の記録が残されていることを知り、この6月末に来館しました。そこで歴史文化館では、『糸菊』の伊勢湾台風特集号などの記事を紹介し、当時の椋山女学園災害救援隊の写真データを提供しました。また、当時高校教諭で、救援隊の活動に加わっていた椋山正弘学園長と、当時高校生で、救援活動の作文を『糸菊』に残している大口ひささんのインタビューの実施に協力しました。

なお、この映画は「それぞれの伊勢湾台風」(仮題)というタイトルで平成26年秋の上映を予定しているとのことです。



【メモリアルルームの準備が進んでいます】

現在、相山女学園中学校・高等学校のメモリアルルーム開設に向けた準備が進められています。室内デザインプランには、生活科学部環境デザイン学科の学生さんが参加しました。実際にプランに参加した感想を伺いました。

生活科学部生活環境デザイン学科4年 滝本研究室 小島有加里



相山女学園中学校・高等学校のメモリアルルームのプランの制作に参加させていただいたことは、とても勉強になりました。現実の物として出来上がるプランを考えることは初めてのことで、改めて物を作ることの大変さを感じました。自分自身の考えを形にすることも難しいですが、それ以上に相手の望む形にすることは難しいものでした。要望を聞き、理解し整理して、案を出すことはすぐにはできませんでした。しかしその時間は楽しく、充実した日々でした。今まで考えなかったことに対して興味を持ったり、何かヒントがないかと思いながら街を歩いたりすることで、見慣れている風景が新しい視点から見ることでできました。気付くことも多くなり、疑問を持ち考えることが増えたように思います。

何か案を考える場合は、一つのことで頭がいっぱいになりがちではありますが、周りに目を向け見渡すことが大切だと気付きました。一步引いた視点に立つことで私自身の視点だけではなく、相手の視点や第三者の視点に立って物事を見ることが出来ます。こうすることで、新たな点に気づき、考えが甘いことを知ることができました。

今回のメモリアルルームのプラン制作に参加させていただいたことで気付いた点は多くあります。一回のことだけとは思わず、学んだことをさらに発展させていきたいと思えます。実際に物が出来上がっていく段階を見る機会はあまり無かったため、今回は貴重な経験をすることができました。



上から見た室内模型

【相山女学園高校放送クラブの活躍、発端は昭和35年から】



高校の放送クラブは、平成25年度NHK全国高校放送コンテスト全国大会において風船爆弾をテーマにした作品で、500校近い参加の中で上位10校に入り優良賞を受賞しました。また東海ラジオのコンクールでは最優秀賞・文部科学大臣賞を受賞しました。高校放送クラブはこれまでも文部大臣賞を含む数々の輝かしい活動経験を誇っていますが、その発端は昭和35年にありました。放送クラブ最初の参加作品「廻り道」は、全国高等学校ラジオ作品コンクールにおいて、全国で210本の参加作品中11作品が入賞したなかで民放連奨励賞を獲得、昭和36年には「箱の中の蟻」が優秀賞を受賞しています。その当時の台本が出演者の一人として活躍していた卒業生から寄贈されました。

【歴史文化館ガイドを改定します！】

『相山歴史文化館・館内ガイド』を改定します。新しい『館内ガイド』はサイズを大きくし、相山女学園の歴史を知る小冊子として読んでいただけるよう、内容を加えました。写真も一部分がカラー写真になっています。相山歴史文化館に来館された際には、新しく生まれ変わった『館内ガイド』をぜひ手にとってご覧ください。

【揚輝荘と栢山女学園】

覚王山日泰寺の近くに揚輝荘という建物があります。揚輝荘とは、大正から昭和初期にかけて（株）松坂屋の初代社長・伊藤次郎左衛門祐民によって建築された別邸です。

揚輝荘は、主な庭園と建物が平成18(2006)年度末に名古屋市に寄贈され、そのうち5棟の建造物が平成20(2008)年5月に市指定有形文化財に指定されました。これまで市民共有の資産として、覚王山地域の歴史と文化の伝承という役割を担ってきました。

揚輝荘の中でシンボルとも言える建物のひとつが南園にある聴松閣（ちょうしょうかく）で、平成25(2013)年8月に一般公開されるようになりました。その中の展示のひとつ「揚輝荘・創建の時代Ⅰ」では、「文化講演会の記録：菊池寛と芥川龍之介」のコーナーに大正11(1922)年1月28日に栢山女学園の講堂で行われた文化講演会についてのパネルが展示されています。この講演会は、当時の新聞「新愛知」が後援したもので、大正11年1月27日付の「新愛知」に講演会の予告記事が掲載されました。当時、名古屋には栢山女学園の講堂以外に講演会に適した会場がほとんどなく、各種の文化講演会が栢山で行われていました。



最近では、栢山女学園大学の学生や、高等学校・中学校の生徒が揚輝荘の様々な催し物に参加しています。なお、栢山歴史文化館の栢山美恵子館長が、揚輝荘の運営母体となっている「NPO法人揚輝荘の会」の要請により、今年度から企画委員に加わっています。

【図書館の臨時閉館中の栢山歴史文化館の入館について】

中央図書館はラーニングコモンズ設置工事のため、平成26年2月1日（土）～3月19日（水）を閉館期間としています。栢山歴史文化館は、図書館閉館期間中も通常通り毎週水曜日、金曜日に開館します。ご来館の際は、図書館入口の右側にある関係者用の出入口からお入りください。

【寄贈品紹介】

- 「バックル」（栢山女学園プール復興記念品）（水野茂生氏）
- 栢山女子商業学校アルバム（昭和17年）（浅井克信氏）
- 昭和35年全国高等学校ラジオ作品コンクール報告書
- 昭和36年全国高等学校ラジオ作品コンクール参加作品 放送劇「箱の中の蟻」優秀賞受賞（佐々雅代氏）

【編集後記】

『栢山正式没後50年展』では卒業生の方から正式先生に関する文章を多く寄せていただきました。また、歴史文化館ニュースの制作には、学生の皆さんにも協力していただきました。本館では今後もこうした皆さんとの関係を大切にしていきたいと考えております。

歴史文化館ニュース 第10号
発行日 2013年（平成25年）12月6日
編集・発行 栢山歴史文化館
名古屋市千種区星が丘元町17番3号
TEL 052（781）1186（代）
052（781）4590（直）
編集担当者 栢山美恵子 河路峰雄 大須賀久範 大喜多優香